

筆圧——力の入れ方を考えよう

新しい指導を考える会

「この子は筆圧が強いね」「この文は、文字が薄くて弱々しいね。書いた子は、優しくておとなしい性格なのかな」などと、筆圧は、硬筆文字を見て話題にされることが多いものです。しかし、毛筆となると、筆圧に注目されることは少なく、半紙に書かれた毛筆文字についても、その評価は字形や組み立て方に集中してきます。筆圧（力の入れ方）を、どこでどのように教え、考えさせたらよいのか考えてみましょう。

1 はじめに

書写では、多くの事柄を理解し、注意しながら文字を書く技能を身につけさせることが求められる。学習指導要領では、中学年に「筆圧などに注意して書く」ということが明記されたが、「筆圧」について、どのように教え、感覚的にどうとらえさせたらよいのか、効果的な指導法

や具体的教材はあるのか、教育現場は困惑しているのが現状のように思われる。指導法や筆圧についてのとらえ方は多種多様にある。現場では、児童の実態に

応じて、創造的な授業を展開するようにしたい。中学年という活動的な発達段階の児童なので、「楽しい書写」を基本として、考えてみたい。

教科書での扱いを見ると、三年の単元1「筆となかよしになろう」、P6「筆

ることによる。その意味で、硬筆での筆圧の実態を知っておくことが大切である。

授業のアイデア① 書き取り

下敷きなしで、漢字ノートや国語ノートに一〜二行の書き取りをし、その下のページや裏のページに凸凹がないか調べてみる。

手で触って、紙の裏側がぼこぼこ飛び出している場合には、次のようなことが考えられる。

- ・鉛筆を強く握って書いている。
- ・鉛筆の芯を紙に強く当てている。
- ・そのほか、姿勢・執筆に着目しても、新たな発見が得られるだろう。

授業のアイデア② クイズ

次のようなクイズを提示し、さまざまな紙に力を入れ方を変えて文字を書いてみる。

〈クイズ〉

えんぴつを強く持つ、まぬけなどろぼうの話です。ボスからたから物のありかを聞かされ、わが家からの道じゅんを、しっかり力強くメモをしたどろぼうは、メモどおりの場所からたから物をぬすみ、メモした紙

は用心深くすて、にこにこ顔で家に帰りました。でも、数日後、何も書いていないメモ帳を調べられ、けいさつにつかまってしまいました。えんぴつを強く持つどろぼうは、どうしてつかまってしまったのでしょうか。

児童は、筆圧によって、道順をメモした下の紙にその跡が残っていたのだということに気づくだろう。その後、次のような学習活動を設定し、どのくらいの力で書くどのような跡が残るのか、実際に試してみさせるとよい。

- ・いろいろな紙を下敷きにして書く。
- ・カーボン紙を敷いて書く。

強く書く、普通に書く、弱く書くという三種類の力の入れ方で書くと比較しやすい。その際、筆記具による違いが出ないよう、鉛筆は2B前後で統一しておく。

また、場合によっては、鉛筆を紙に強く押し付け、文字が濃くなるように漢字10文字を書く、鉛筆を軽く握り、紙に対して軽いタッチで漢字10文字を書くなどといったことを試してみてもよい。時間を計るなどし、書く速さとの関係を考えてみるのも興味深い。

こうした学習活動を通し、児童の筆圧

のとくちようを知ろう。」から、力の入れ方、つまり筆圧について意識させている。「ほ」がどのくらい紙と接しているかで線の太さに違いが生じるのだと理解させることが肝要になる。

その後、単元3「力の入れ方を知ろう」での「払い」の筆使いの学習を皮切りに、折れ・はね・そり・点・曲がりなど、送筆や終筆部分の力の入れ方について扱っている。評価にも反映させるようになっていく。書いているときの力の入れ方の感覚は、他人では評価しにくいいため、自己評価が位置づけられている。

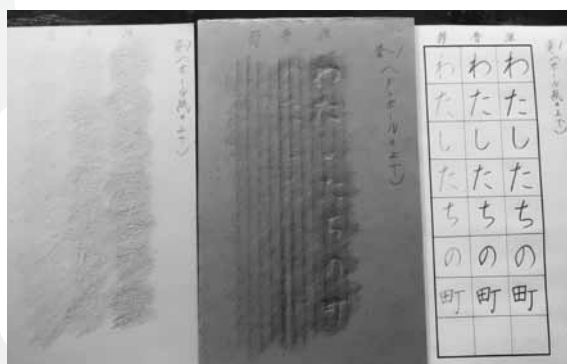
- ①硬筆指導を柱に、筆圧について考える。
- ②毛筆指導を柱に、筆圧について考える。
- ③硬筆と毛筆の両者を関連させて、筆圧について考える。

という三つの観点で、指導法の工夫について考えてみたい。

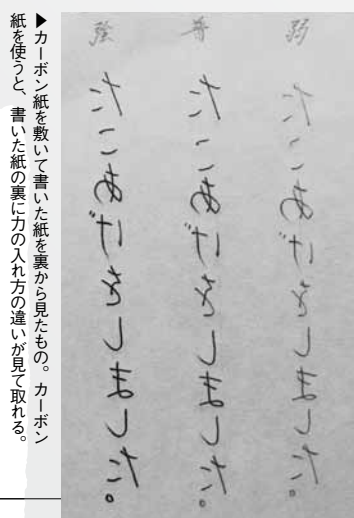
2 硬筆による指導

学習指導要領には「毛筆を使用して筆圧などに注意して書く」とある。これは、そもそも毛筆を、硬筆による書写の能力の基礎を養うためのものと位置づけてい

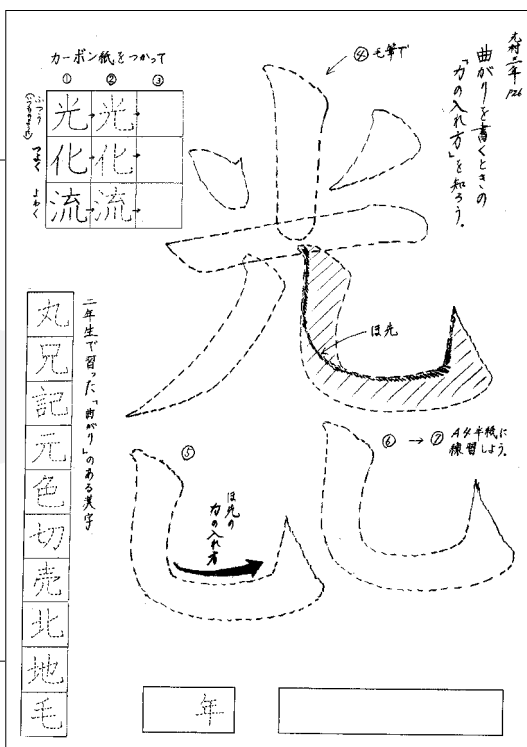
の実態を把握したり、児童の目を筆圧に向ける土台を作ったりしておきたい。



▲右から、3種類の力の入れ方で書いた紙、下敷きにした段ボール、下敷きにしたボール紙。力の入れ方による文字の太さ・濃さの違い、跡の残り方の違いがよく分かる。



▶カーボン紙を敷いて書いた紙を裏から見たいもの。カーボン紙を使うと、書いた紙の裏に力の入れ方の違いが見て取れる。



▲授業で使った
ワークシート

▶「曲がり」の
部分を全員で
空書きする。



◀カーボン紙を
用いて、力の入
れ方について考
える。普通の力
で→強い力で→
軽いタッチで。



◀教科書は、穂
先の向きの学習
も含んでいる。
しかし、ここ
では、縦から横
に筆が運ばれる
際の、徐々に力
が加わる感覚に
焦点化して指導
した。

「毛筆を使用して筆圧などに注意して書く」学習で、児童の主體的な追究を促すには、硬筆によって自分の書いているときの力の入れ方（筆圧）に関心をもたせることが不可欠である。

カーボン紙を使用した際、児童からは、「何、これ？」「これで書くと、おもしろい！」という声が上がった。書いた文字が用紙の裏側に写り、さらに、力の入れ方によってそこに濃淡が生じる。児童にとって、それは新しい発見である。クラス中が、書くことを別の角度から楽しみ、関心・意欲を高めた授業となった。

- ①「曲がり」の部分を書き添えて、力の入れ方を確かめる。
- ②既習漢字の中から「曲がり」を含むものを探し、硬筆で書く。
- 一年生…丸、見、七、先
- 二年生…丸、記、兄、元、光、色、親、切、電、読、売、北、毛など

4 硬筆と毛筆の両者を 関連させた指導

教科書三年P26・27「曲がり」における、硬毛関連の事例を紹介したい。

授業のアイデア① 体重計の上で書く
セロハンテープ等で、紙を体重計の上に固定し、左手の力が加わらないようにしてから、毛筆で左払いや右払いを書く。

ここでは、書く動作に関心をもたせ、児童自身が力の入れ方を数字で確かめることができる、実験的な取り組みを紹介したい。家庭にある体重計や計量器を使って、筆圧を数値化してみるといふものである。

教科書三年の単元3「力の入れ方を知ろう」では、左払いと右払いが示され、力の入れ方を説明している。穂先マークで、穂がどのくらい紙と接しているか、始筆・送筆・終筆の部分ごとに示しているが、これを書き手の感覚としてどう伝えるかは難しいところである。

硬筆に比べ、毛筆は筆圧の変化を視覚的にとらえやすい。線の太さ等にその変化が分かりやすく表れるからである。しかし、手の感覚からすると、微妙な筆の上下運動により、力の入れ方（筆圧）を感じ取り、身につけることはなかなか難しい。

3 毛筆による指導



▼右払いのいったん止める、いちばん力が入る部分。0.6キログラムの力がかかっている。



▲右払いの書き始めの送筆部分。0.4キログラムの力がかかっている。

右払いであれば、筆を軽く置く始筆部分の0.2キログラムから始まり、0.4→0.6キログラムと徐々に力を加えながら筆を運ぶ様子と、徐々に力を抜いて右方向に筆を運ぶ、0.4→0.2→0キログラムとなっていく様子を、体重計の目盛りや表示によって目で確かめることができる。

③カーボン紙等を用いて、硬筆で「曲がり」を含む漢字を書くときの、力の入れ方を検証する。

④「力の入れ方がよく分かるように毛筆で書いてみよう」と促し、「曲がり」を含む漢字「光」を毛筆で何度も書いて、練習する。

※六画目の「曲がり」の筆使いに着目し、力の入れ方を考える。

⑤学習を生かして、「曲がり」を含む漢字を硬筆で複数まとめ書きする。

授業のアイデア② 計量器の上で書く

体重計と同じようにして、計量器の上で硬筆で文字を書く。

硬筆での力の入れ方を見るには、10グラム単位で計れる、台所にある計量器を用いるのがよい。微妙な力の入れ方の変化をとらえて示してくれる。



▲計量器を用いれば、硬筆の力の入れ方の変化が視覚化できる。

このように数値化することで、児童に力の入れ方（筆圧）への関心をもたせることができるだろう。ただ、大切なことは、この後、何度も何度も繰り返し文字を書かせることである。数値化により自覚した力の入れ方についての感覚を、何度も文字を書くことによって、実際の手の動きと結び付ける必要がある。